

御鯨街道コースには、こんなにすてきな見所があります。あなたはどこに行ってみます？

歴史に守られてきたアーティストの競演

① 鵜飼

長良川の鵜飼は古典漁法を今に伝える岐阜市の夏の風物詩。その歴史は古く、1,300年以上前にまでさかのぼることができる。織田信長は鵜飼を保護し、「鵜匠」という名称も信長が付けたという説もある。江戸時代は、徳川家も鵜飼を見物し、尾張徳川氏は鮎を将軍家に献上するため、長良川の鵜飼を保護し漁業者に「鵜匠」の名を許していた。俳聖・松尾芭蕉も「おもしろうて やがて悲しき 鵜舟かな」という有名な一句を残した。また、昭和11年と昭和36年の2度にわたり、チャップリンも見物のために来岐。鵜匠をアーティストと賞賛し「ワンダフル」を連発したといわれている。鵜飼は鵜匠が10～12羽の鵜を見事な手縄さばきで操り、鵜が鮎を捕る日本の伝統漁法の1つ。毎日を鵜とともに暮らす鵜匠は代々世襲制で、常日頃から鵜と一緒に生活しているため、鵜匠と鵜は呼吸の合った動きを見せ、見事に鮎を捕らえてくる。暗闇に満ちた水面にかかり火を焚いた鵜舟がゆっくりと現れ、鵜が鮎を捕らえる様子を眺める事ができる。目の前で、勇壮な歴史絵巻が繰り広げられ、幽玄の世界へと誘う。鵜飼観覧船はもちろん、右岸に整備されたプロムナードからも楽しむことができる。

鵜飼のことならここへ

② 鵜飼観覧船事務所

鵜飼を観覧船に乗って楽しむ際、この事務所でも乗合船や貸切船の予約ができる。平成21年の春頃には、川原町の景観、傍らの川灯台ともマッチする外観にリニューアルされる。

紙でできた鯉のぼり？享保の改革に由来

③ のぼり鯉

岐阜を代表する伝統工芸品の一つで、紙でつくられた鯉のぼりである。紙は、かつて長良の川渡を介して流通していた美濃和紙を使い、手書きの絵を相まって親しみをもてるものとなっている。紙で作られるようになったのは、徳川吉宗による享保の改革（1716～1745）で、「布の鯉のぼりは贅沢故、紙を使用せよ」というお触れが出されたためである。「のぼり鯉」という名称は、中国の故事にならない、子どもの健やかな成長あるいは出世を願い、縁起が良いよう付けられた。現在、東材木町の1店のみで製造・販売されるのみとなっている。

江戸へ献上した熟鮫づくりの拠点

④ 御鯨所跡

江戸時代、江戸幕府に献上するための、鮎の熟鮫をつくる「御鯨所」が現在の益屋町付近にあった。河崎喜衛門家が御鯨屋（後に御鯨元と改称）発掘調査では、竈なども見つかったが、現在は民家となり、広い敷地だった御鯨所の面影は見られない。

岐阜市には珍しい卯建

⑤ 卯建（今町）

岐阜市内では、卯建のある家屋は数軒しか残っていないという。今町のこの家屋は、現在は企業の事務所として活用されている。卯建は、元々は火災の延焼を防ぐための設備である。出世できないこと等を「卯建が上がらない」というのは、この卯建を家につくれないほどさえないからという説と、棟上のことを昔は「税を上げる」と言い、お金持ちでない家を建てられない、という説とがある。

道三の菩提寺

⑥ 常在寺

開山は宝徳2年（1450）、土岐家守護代齋藤道椿が、妙覚寺から世尊院日範を招いて建立したとされ（日蓮宗京都妙覚寺の末寺になる）、文殊菩薩が安置されている。正式名称は、鷲林山常在寺という。齋藤道三から三代にわたる菩提寺だったため、この道三と息子の義龍の画像（国重要文化財）を所蔵している。道三は後に土岐氏をも滅ぼして美濃国主になり、常在寺に寺領を与えて保護した。道三は、京都の妙覚寺の宗徒であったが、環俗して油売りの松波庄九郎として美濃にきて、常在寺を拠点に美濃国主になったと伝えられている。しかし最近の調査により、「国盗り」は、道三一代だけで成されたわけでは無いらしいことが解明されつつある。

芭蕉が泊まった寺

⑦ 妙照寺

梶川町にある妙照寺の創建は、天文3年（1534）で、本堂は寛文2年（1662）に建てられた。慶長5年（1600）、当時の岐阜城主の織田秀信から、竹中半兵衛（豊臣秀吉の家臣）の屋敷跡を寄進され、現在の位置に移された。この寺の庫裡は岐阜県内に現存している神社・仏閣の中で最古のもので、本堂も庫裡も岐阜市指定重要文化財である。貞享年間、当時この寺の僧で後にこの寺の住職となる己百が、旅で京都にいた芭蕉を訪ね入門し、この寺に松尾芭蕉を招いた。芭蕉が実際にこの寺を訪れたのは元禄元年（1688）6月で、奥書院に約1ヶ月間に亘り長期滞在した。その座敷は今も現存し、挨拶句として「やどりせむあかざの杖となる日まで」と詠み、この寺にその句碑もある。また、己百の墓もある。この寺の池は、信長が岐阜町建設の際に、土壘用の土を掘り取った跡だとされる。

武家屋敷を分ける堀

⑧ 梶川堀

織田信長は、永禄10年（1567）、稲葉山城（後の岐阜城）主となり、当時の井の口（後に信長が岐阜と改名）に本拠地を移し、すぐに城下の整備を始めた。この梶川堀から東側には武家屋敷、西側には町屋を配置した。慶長5年（1600）以降、梶川堀より東側の地区は、古屋敷村となった。「梶川」とは、信長の臣下だった「梶川高盛」の屋敷が、堀の近く（現在の常在寺内）にあったことに由来するとされる。現在は、開渠になっている部分も少なく、また堀が狭いため、あまり人々の目に触れることなく、静かに流れている。

日本一の鮎の熟鮫を運んだ道

⑨ 御鯨街道

江戸時代、尾張藩が岐阜の特産品の一つとして鮎の熟鮫を幕府に献上する際に利用されていた街道である。鮎の熟鮫は他の藩からも献上されていたようだが、岐阜のものも量・質ともに最も優れていたといわれる。元来の道は尾張街道（あるいは岐阜街道）で、地域の愛称として「御鯨街道」「鮎鮫街道」などと呼ばれる。御鯨街道と認識されているのは、稲沢市内で美濃路と合流するまで（約26km）が一般的である。岐阜県内では、笠松跡までが街道である。起点は鵜飼が営まれる湊町付近、御鯨所のあった益屋町付近という2説がある。当時の道のほとんどが残されており、現在も日常的に利用されている。沿線は、場所によっては古い建築の民家が見られ、風情がある。

堀跡だけが面影を伝える奉行所跡

⑩ 岐阜町奉行所跡

元禄8年（1695）に、岐阜町奉行所が開かれ、岐阜の統治や長良川の水運の管理を行なった。ここには手代屋敷・同心屋敷・道場などもあった。徳川家康は、慶長5年（1600）の関ヶ原の合戦に勝ち、それまで支配していなかった美濃を統治した。その際、岐阜町は幕府の直轄領、その他に加納藩、30ほどの旗本領などに分割して統治した。岐阜町が尾張藩領となったのはその後であり、町民の要望もあって奉行所を設けたといわれる。享保2年（1717）8月、尾張藩の量奉行だった朝日文左衛門が畳の検分等で岐阜に出張した際も、この奉行所に立ち寄っている。

岐阜で旅の疲れをいやそうかー芭蕉

⑪ 芭蕉句碑（翁碑/伊奈波神社）

「山かげや身を養はむ瓜ぼたけ」
伊奈波神社にある翁碑で、句も刻まれている。元禄元年（1688）、松尾芭蕉は、4度目の伊賀への帰郷の帰路に岐阜に寄った。その時、呉服小間物雑貨商で、岐阜の俳壇の中心人物だった安川落梧に案内され伊奈波神社を訪れた。その帰り際に、近くにあった浄土院で句会が開催され、そこでこの句を詠んだとされる。句意は「この付近は山かげになっていて涼しく、しばらく旅の疲れをいやそうか。畑には瓜もごろりとしている。」といったものである。

道三が遷宮

⑫ 伊奈波神社

1900年以上前の景行天皇の頃、椿原の地（現在の金華山の丸山）に鎮斎したのがこの神社の始まりとされる。御祭神は、天皇の第一皇子の五十瓊敷入彦命（いにしきいりひこのみこと）である。その後、天文8年（1539）に齋藤秀龍（後の道三）が稲葉山（金華山）に入城する際に、現在の伊奈波通に遷したといわれる（神様が足下になってしまうことを申し訳なく思ったとされる）。昭和14年（1939）には、国幣小社となった。金町の金神社の祭神である淨熨斗媛命（ぬのしひめのみこと）は五十瓊敷入彦命の妃、若宮町の榊森神社の祭神が市牟雄命（いちばやおのみこと）が五十瓊敷入彦命の子ども、という関係にある。

尾張藩主の御成

● 岐阜町本陣跡

米屋町通りに岐阜町の本陣があった。岐阜町は尾張藩であったが、関ヶ原の合戦の前哨戦での岐阜城落城を記念し、後年尾張藩主が岐阜町に来るのにあたり、賀嶋邸に本陣が設けられたといわれる。岐阜御成と呼ばれていた。尾張藩の歴代藩主は、必ず一度は岐阜を訪れ、ここを定宿とした。徳川宗春は、享保18年（1733）に岐阜を訪れ、鵜飼を見物したり、お忍びで伊奈波神社の門前の茶屋へ行ったりしたという。